

2013

1

目次
CONTENTS

2 新春のごあいさつ

4 水鳥

7 ごみの減量化に取り組みましょう ほか

8 公民館まつり
那珂市防災訓練

9 那珂聖苑 周辺環境調査
県民交通災害共済加入受付

11 那珂市内放射線量の測定状況

12 那珂市消費生活センターです

14 まちの話題

17 Information ほか

18 さわやかさん、表紙の裏側 ほか



みんなでお餅つき！（ゆたか保育園：防火餅つき会）

水鳥

16

「東木倉村絵図」

に見る村の景観

那珂市史編さん委員会では、郷土の発展の姿を理解する一助として平成13年度に『那珂町の村絵図』を刊行しました。これに掲載された「村絵図」は、水戸藩の検地事業が終了した後に、村ごとの「検地帳」とともに作成されたものがほとんどです。中でも、村全体を鳥瞰したもの



「東木倉村絵図」

は当時の村域を理解する上で大変貴重なものです。絵師は、専門家はもちろぬ絵心のある庄屋たちも含まれています。村では2部作成し、1部は藩へ提出し、残りは庄屋など村役人のもとに保管されました。

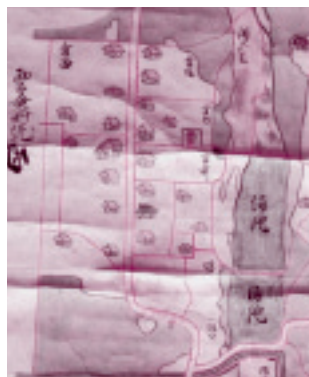
ここでは、先の刊行後に見出された「東木倉村絵図」（根本喜代寿氏所蔵）を紹介してみます。「天保改正」・「東木倉村図」と赤筆で記された軸装されたもので、検地事業が終了した後の天保14年（1843）から嘉永3年（1849）頃にかけて作成されたものと思われます。絵師の照沼貞斎については明らかではありません。しかしながら、東木倉村全体が具体的に色彩豊かに明瞭に描かれており、当時の村域の様子を知れる上で大変貴重なものです。根本家の先祖根本半次衛門徳廣は庄屋役として検地に参画していました。これ

小場江用水路から庚申坂へ

当時、那珂川対岸の袴塚村から那珂台地へ向かうには、万葉集にも詠われた「曝井」のある「滝坂」を下り、那珂川の「中河内の渡し」を渡り、中河内村の鹿島神社を過ぎ、田圃の中道を那珂台地へと向かう。また、台渡村からは現茨城大学裏手通りの小岩井坂を下り「中河内」あるいは「国田の渡し」を渡って東へ向かったものと思われる。



「国田の渡し」跡地



「東木倉村絵図」に描かれている那珂川水系付近と、その住居群

東木倉村下の小場江用水路を渡ると道路は左右に分かれる。右方へ行くと左手に上溜池・下溜池が見える。いつ頃掘られたものであろうか。史料は見出されていないが、小場江用水が造られる前の水源とされたもの

であろう。下溜池の南端と2つの溜池の境界、さらに上溜池の上方にと3箇所以上に水車が回っていたという。この溜池の西側台地には、現在円墳が1つあり、墳丘の裾地に文化3年（1806）の如意輪観音石仏や古人の墓碑が見られる。廃寺（那珂西村真言宗勝幢院末寺の常福院）の跡といわれている。古墳は単独で存在することはなく、当然近くに住居群を伴う。那珂川水系を利用した先人たちが住んでいたことを示すものでもある。

一方、左方へ上ると、途中の右手に元の細い道がかすかに見える。この坂は庚申坂と呼ばれているという。たしかに、明和元年甲申（1764）の庚申石仏（上半身欠損、天保期に廃仏として破壊されたことがある）と文政10年（1827）の二十三夜供養石塔が残っている。



庚申石仏



後藤信之丞が追鳥狩に出陣した記録のある
信之丞筆「天保11年『御用留』」、後藤太氏蔵



後藤國彦



後藤信彦
（『那珂町史』より）

さらに上がると後藤家の墓所があり、徳川斉昭時代に郷士として追鳥狩などの軍事訓練に参加した後藤信之丞や、村長・県会議員として活躍した後藤武彦、その子どもで純真な生徒思いの青年教師として教育の改革や農村改革を目指して奔走した國彦・信彦兄弟らも眠っている。坂を上りきると宿へ出る。宿通りの直線の道路は福田村へ通じる主要街道、太田方面を目指す人々の往来も多かったと思われる。

後藤家

宿並の東側には郷士で庄屋役を務めた後藤家がある（絵図には特に青系で描かれている）。後藤家の「屋敷図」によると、通りに沿って南からは土塁が築かれ、その内側には庭木が並木植えされていた。北からは板塀が張られ、その内側にも同じく並木植えがなされ両方の間には扉をつけた大きな腕木門があった。奥には天保の飢饉に際して、藩命を受け雇用の対策の一つとして建てられた防火用二重壁造りの大きな米倉が今でも残っている。



後藤家の米倉

その北方には鎮守吉田神社がある。元は八幡神社であったが徳川光圀の八幡改めにより改称された。境内には市指定天然記念物の老木「つばき」がある。明治の初期、廃仏毀釈政策により清水寺が清水神社に、寺の境内の弁財天が厳島神社と改められたが、清水寺再興の後はこの神社境内に寄宮されたという。
また、石尊大権現不動明王の石塔（安永5年（1776）と享和2年（1802））もある。相模国（神奈

根本家



市指定天然記念物
「つばき」

川県）大山神社（石尊宮、雨降山）参り信仰が盛んであったことが窺える。神社前の道を東へ下りると宮前溜池がある。湧水池のため、常に一定温度であり、村人はよく「種粬」を浸して芽出しをしていたという。

神社の西方、街道の西側に見える大きな「曲がり屋」が庄屋を務めた根本家であり、後の衆議院議員根本正の生家である。半二階は養蚕業などの作業場となっていた。根本正が、幼少から12歳までの多感な少年時代を過ごした故郷、これら周囲の環境は様々な体験を通して逞しい身体と豊かな精神力を育んでいた様子を想像させてくれる。



根本正
（『根本正伝』より）

根本正は学問に志し、米国留学を果たして国政に参加し、未成年者の禁酒禁煙法や義務教育の無償化などの教育改革や世界平和への実現および水郡線の敷設などに尽力したことで知られるが、根本家を嗣いだ兄東之介徳壽も学問への意欲が高く筆記をよくした。孫の勉を励ますために、維新前史『桜田義拳録』（雪の部）を写して「国ノ為ニ身ヲ捐（すつ）ルハ是ヲ仁ニ本ヅク」と義拳を称え、さらに
右、維新前史櫻田義拳録三巻の内、雪の部水戸烈公斉昭の君の北海道開拓の請願、及び蝦夷地経営に関する件を抜写す。
目も心も労して筆を留る
時年八十歳 根本東之介 印
大正五年十月
天保八丁酉四月生 徳壽 印
と記して、その著の中に流れる水戸藩主従の精神を体得させようとしたのである。



維新前史『桜田義拳録』
（雪の部、根本喜代寿氏所蔵）

街道が下り始める左手の台地上に根本家の墓所がある。ここに、根本正の祖先・祖父母や両親が眠る。根本正の最愛の長男美倫も眠り、正自身もここに埋葬され眠っている。正・美倫父子を顕彰する立派な碑が今日のふるさとの繁栄を見つめている。



根本家墓所にある
顕彰碑

清水寺

街道に沿って一旦下がってまた上がる左手に、松林に囲まれた清水寺（本尊白衣観音）がある。「清水の観音様」として多くの参拝者で賑わったといわれる。

境内下段には湧水豊かな清水池に弁財天が祀られている。その脇には大きな山門があり、手前にもお堂が見える。池から流れ出る水量はかなりのものと見える。この水は、周辺の田圃を潤すとともに下方の溜池に溜められ、さらに溜池の下を流れている小場江用水路に入り、用水路の水



清水池

と相まって下方の田圃に流れ出て豊かな稔りをもたらす。溜池下へくねっていた小場江用水路は、現在は直線路に据え変えられている。鎮守吉田神社の秋の祭礼には、収穫を終えた下方の村人がお礼の奉納米をもつて陸続と集ってきたそうである。清水池前の石段を登ると、正面に2層建ての本堂・観音堂が眼前に迫る。廻りには庫裏その他の堂宇も3棟見える。徳川光圀は明の高僧心越禅師に師事し、禅師の弟子呉曇をして開かせた寺であるだけに、勇壮華麗な伽藍であったことを窺うことができる。深淵幽玄な境内・伽藍と滾々と湧き出る清水の流れに接した参詣者には、まさに「京都の清水」の思いとしてこの観音堂が迫ったことであろう。



「東木倉村絵図」に描かれた清水寺周辺

清水原と善重・与重の碑

この寺の先は福田村へ向かうが、その辺りは「清水原」と呼ばれた平地林で、水戸藩の軍事訓練場でもあった。（以下は『水戸紀年』による）

○享保3年（1718）正月

公（綱冬）今月後台野山に田獵す。

○文化14年（1817）4月

本城及び清水原・仙波原陣法訓練、歳時怠ることなし。

○文政2年（1819）3月

清水原田獵、鹿二頭を獲たり。

○文政8年（1825）11月19日

江戸浪人山田勇衛門、城北清水原に於いて銃術打ちあり。

○天保4年（1833）3月

9代藩主烈公斉昭帰国。在国中鷹場としてあてられた7カ村は武田村・堀口村・市毛村・津田村・中台村・東木倉村・西木倉村

また、『水府志料』には「林野」（馬などの牧草地）として17町歩余り、中台・東木倉・西木倉・豊喰など大方は入合の地で曠野なり、これらすべてを清水原というところ。

清水原の一面に後台野中地区がある。ここに利兵衛が息子「善重・与重」の孝行兄弟がいた。父の利兵衛は誠実・順法精神が高く子供の養育にも精励した。父の病後、長子の善重は父の意向を察して弟与重に新宅

させたいとしたが、弟与重はそれでは田畑が一層少なくなってしまうと、難渋するのみに断り、兄弟夫婦仲良く父母に孝行を尽くして農業に精を出した。天明8年（1788）7月、孝子・節婦・力行を奨励していた6代藩主徳川治保（文公）は、この父子に金子若干貫を与えて表彰した。大正7年（1918）5月、那珂郡長の丹誠は兄弟の徳を偲び撰文を記し、地域住民とともに頌徳碑を建立した。この地域には、純朴・徳行の農民たちがいたのである。



頌徳碑

おわりに

古文書など史料を保存し継承することは、先人の足跡への敬意であり子孫繁栄への期待でもあります。芭蕉の門人向井去来句「元日や家にゆずりの太刀帯かん」のように、正月を迎えて、各家の伝統と誇りを見出し、先祖の徳への畏敬・継承の念を意識したいものです。また、これを機会にさらに他地区の村絵図が発見されることを期待しています。